
私は王子

奏音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私は王子

【Nコード】

N9085N

【作者名】

奏音

【あらすじ】

とある時代のとある国に生まれた、ある双子の物語。

この国には3つの“不の象徴”が存在して……。

わたしのおうちは、ここなの。

え？

うん、そうだよ？

ここはやま。

だって、わたし“すとねーとちるどねん”ってそんなざいなもの。

あそこにおしろが、あるでしょ？

かぞくがいるの。

わたしのおとうとは、おうじさまなんだ。

えらいば、やさしいまま。

ごうかなごはん、りっぱなぶく、なにひとつふじゆつのないくらし……。

うらやましいかって？

ううん、ぜんぜん。

だって、わたしは“いてはいけない”そんざいなんだって。

くわしいことは、わからないんだけどね？

たまにおとうとが、こっそりあいに来てくれるから、さみしくないよ？

昔々、遠い遠い国で仲の良い夫婦が居りました。

厳しくて、“国の為になる”判断の出来る立派な王様。

優しくて、“誰よりも”国を愛する美しい后様。

この2人が、国のトップであり、象徴であり、民の誇りでもありました。^{たみ}

ある朝、王様と后様が住む立派お城の広場に、民が集められました。
何でも、大事な報告があるそうで。

“何かあったのか？”

と、民は急いで城に集まりました。

ある程度の民が集まるのを見た、王様は広場に向かって嬉しそうに叫びました。

その内容はこのようなものです。

「子を授かった。いずれこの国を引っ張っていくだろう、大事な大事な我が子を……。出産予定は、4ヶ月後だろうと医者が申しておった。次は産まれた時に報告する。楽しみに待っておれ」

王様の横には幸せそうな表情を浮かべ、優しく自分の腹を撫ぜる后様の姿もあった。

民は喜び、宴を開いた。

お后様が、ご懐妊！

次世代の王が生まれるのだっ！！

皆が口を揃え、1日中喜びに酔いしれた。

しかし、

その喜びは、

王の子が生まれた時、

混沌へと……。

もう頭が見えてます！

あと少しですよ！

あと、もうひとふんばり！

我が子に会えるのを、今か今かと廊下で待っていた王様。
王様の耳に、ずっと入っていた助産師の声援が、途切れた。
刹那。

おぎゃあ、おぎゃあ！

元気な赤子の声が聞こえました。

その声を聴き、生まれたばかりの我が子を一目見るため。

そして、頑張ってくれた妻に労いの声をかけるために部屋に入った。

「よく頑張ってくれた、今から民に報告してこよう」

その言葉にし、赤子を見、部屋を出ようとした瞬間だった。

「まだよ！まだお腹に子が居るの！」

そう叫んだ后様は青ざめてました。

それを聞いた王様は、もっともつと青ざめました。

「何だと?!」

王様と后様が青ざめるのも無理はありません。

だって、この国には双子は不のモノだと言い伝えられてるのだから……。

間を置き、もう1人の赤子も生まれました。

赤子2人の鳴き声だけが響く中、1番先に口を開いたのは后様でした。

「あなた、この子たちを見て」

そう言われ、誕生したばかりの我が子たちを見ました。

目に入った我が子は、2人ともかわいらしい。

「なぜ、不の伝えなのでしょう？こんなに、かわいい子が2人も

来てくれたのに」

「だな。よし、2人とも育てるよう」

“2人とも、他とは比べようのない。大事な大事な我が子なのだから……”

2人の声が揃い、決心しました。

2人をかわいがり、古に反^{いにしえ}してでも大事に育てる……と。

王様は早急に民を集めれるだけ集め、嬉しい報告をした。

大事な我が子が“2人”誕生した。1人の王女と、1人の王子が共に生まれたのだ。

2人を分け隔てなくかわいがあると、妻と決めた。どちらも他とは比べようのない、かわいい我が子だ。

これは余程のことがない限り、変えようと思わない。

たとえば、古からの教えに反せようとも……。

それを聞いた民は戸惑い、反対の声も多くあがりました。

しかし、我らが誇りである王がどちらかを差別することはせず、同等にかわいがると宣言した。同

それを反対するものは少し時が経つと、ほとんど居なくなつた。

王の子が生まれて、一つめの季節が終わりを告げました。

この時、王様と后様はある不安を抱えていたのです。

先に生まれたのは王女。

赤い瞳をもつ女の子。

後に生まれたのは王子。

濃い赤紫の瞳をもつ男の子。

生えはじめた髪の色。

王女は白、王子は灰色がかった黒。

赤い目と白髪をもつ赤子は悪魔の子。

それがこの国の不の伝えの3つの内の、2つめ。

「ね、ねえ。かわいい我が王女が、悪魔の子なわけ……、ないわよ、ね？」

「当たり前だ！どちらもかわいい我が子だ！！ 悪魔なんぞの子な訳がないっ！」

后様が問いかけ、王様が叫びました。

まるで、祈るかのように。

次の季節がやってくる頃、1人の民が王族の城へやってきました。

その者は、他の民たちの代表としてやってきたのです。

王様は、嫌な予感がしました。

それは后様も同じです。

なので、我が子2人を抱きしめました。

無意識に、王女を強く抱きしめて……

「あ、あの……」

代表者は言いにくそうに口を開きました。

「王女が赤目の白髪だと、噂で流れておるのです。事実なら、“不の伝え”の2つめでございます」

「だったら、何だと言っただ？」

「……………。事実なら、手を打っていただかないと私どもは不安なのです」

王様と后様の、不安は的中しました。

代表者から一通りの話を聴き、『検討しておこつ』とだけ伝え、帰らせました。

“手を打つ”とは、我が子を殺せとゆうこと。

まだこんなにも幼いのに。

しかし、代表者が言ったことは王様も気にしていたことでした。

今年は天気に恵まれず、作物が十分に育たない。

出生率があまり良くない。

その他にも、告げられたこと。
それらの全てが事実でした。

しかし、“双子が生まれた場合は後の子を殺せ” “赤目白髪は、居ると分かった時点で殺せ”と言われているのです。

そうになると、王は2人の子を失うことになります。

王様と后様は、悩みました。

古の伝えなんぞ、気にしないでおくか？

かわいい我が子に手をかけたくない。

我らは親である前に、王だ。

王である前に親でしょう？
子に罪はない！

夜通し話し合い、悩みに悩み。

王様と后様は決めました。

子に罪はない。

だが、古から伝わる不の象徴に2つ該当する王女。
王族に居るのでは示しが見つからない。

したがって……、

王女を孤児院に預け、王族から永久追放にする。

そう。

幸か不幸か、どちらが先に生まれたのかを知らせてなかった。

王子は“不の罰”に、該当しないと嘘をついたのです……。

王様はかわいい我が娘のために。

少しばかりの慈悲として、永久追放に。

断腸の思いで、我が娘を不幸の谷へ突き落とす決断をした。

しかし后様は、娘の僅かな幸せを願った。

だから、孤児院へと。

我が国のために、娘のために。

この両方の想いを、捨てきれなかったから……。

元王女が孤児院に預けられ、5年。

王女だった、少女に対する孤児院の仕打ちは最悪な物でした。

着るものは、つぎはぎだらけ。

食べ物、残飯。

与えられた部屋は、暗く日の届かない地下室。

ストレスがあれば、殴られ蹴られ。

お前は存在してはいけないんだと、罵られ……………。

しかし、少女は頭の賢い子でした。

抵抗をせず、逃げ出せる時を待っていました。

衣服がつぎはぎだらけでも、まともな食事ができなくとも、陽に当たらなくても。

少女は耐えた。

みんなが城での祝いの席に招かれて、孤児院を空にした時、少女は動いた。

台所に行き、腹を満たした。

そして大きな袋を探し、様々な大きさの衣服や日持ちしそうな食べ物を含めた。

少女はそれを持ち、走った。

走って走って、街の外れにある山林にやってきた。

山なら、人が見えるから寂しくない。

林なら、隠れる場所がいっぱいある。

そう考えたから。

少女が、山林に隠れ1年が経ったある日。

まだ誰にも会ってなかったのに、1人の少年に出会った。

それはそれは、立派な服を着た少年に。

見つかった、またあの生活に戻ってしまう!!

そう思い、少女は逃げました。

でも、山林でギリギリな生活をして貧相な少女。

ちゃんとした生活を送ってるであろう少年。

この差は比べようがなく、すぐに少女は少年に捕まりました。

「いやっ！はなして！！」

少女は叫びます。

「僕は王子……、君はお姉さま？」

少年は王子だったのです。

しかし、何のことだかわからない。

元は王族だと知らない少女は、

「そんなの知らない！はなしてっ！」

そう狂ったように叫び、涙を瞳にためはじめた。

「はなして！ おねがい、はなして。 はなして、よう……」

語尾を小さくしながらも、少女は一生懸命に逃げようと思いました。

「ごめんね、怖がらせて。大丈夫だよ」

微かに震えて、泣き出しそうな少女。

「大丈夫、大丈夫だよ」

王子は、その言葉を少女に呪文のように何度も呟き、抱きしめました。

少女が落ち着いてきた時、もう一度問いました。

「君は王女？」

それに対して少女は首を横に振り、応えませんでした。

「君は1年くらい前からここにいるんじゃないの?」

少女は軽く目を見開き、一瞬固まりましたが、次は縦に振ります。

「やっぱりお姉さまだ。 君は王女だ」

王子は、そう言って、花が咲いたような笑みを浮かべました。

「ちがうつ!」

少女は首を横に振りながら言った。

「わたし、うまれてきちゃいけなかったの! だ、だから。ここに……っ、いるの。そ、そんなわたしが、おうじよなわけが、ないんだよ……?」

手を伸ばし、言葉を放ち、瞳から溢れた雫を拭いながら、

「うつん、君は王女だよ。今から、本当のことを教えてあげるね」

そう言って軽く表情に影を落とし、王子は話し始めた。

しばらく少女は、静かに王子の話を聞いていた。

そうして、自分が目の前にいる王子の双子の姉で、元は王族の人間なんだと知った。

最後に王子は、あることを聞いた。

「ねえ、お姉さまは僕を恨めしい？」

何で恨めしく思わないといけないのか、理解できない少女は首を傾げた。

「だって、僕だって“罪”の対象だったのに……。それなのに、僕だけが、不自由なく、贅沢な生活を送ってるなんて、おかしいと

思わない？」

言い終わると、王子は顔を伏せました。

今度は王子が泣きそう。

そう思った少女は、

「だいじょうぶ。 うらんでないよ」

そう言って頭を撫ぜた。

王子は、きょんとした顔をしてから笑った。

「ありがとう、ごめんね」

そう言いながら、ほっとしたように。

王子は、

「ごめんね。そろそろ帰らないと、護衛が探しに来るから帰るね。また来てもいい？」

王子が不安気に聞きました。

「うん、つづのいいときでいいから。いつでもきてね、まってるから。」

王女は嬉しそうに、満面の笑みで答えました。

それを聞いて王子は安心しました。

「ありがとう、お姉さま。またすぐに来るから、待ってて」

そう言って帰っていった。

約束通り、王子はすぐに少女に会いにきました。

ある日は、衣服をもつて。

また別のある日は、食べ物をもつて。

それは、週に1回のペースで繰り返されました。

ある日、王子はいつも通り少女に会いに行きました。

いつもと違ったのは、家に帰ってから父と母に少女のことを話したことです。

「お姉さまに会いました……。お父さま、お母さま。お姉さまと会いたくありませんか？」

父と母が息を飲んだ音が聞こえた。

そして、空気が凍りつくのを感じた。

その後は大変でした。

「何を言っておる！娘なんかいないっ！！」

普段の冷静な姿からは想像できないくらい、取り乱す父。

「いい、あの子は私たちとは関係のない子なの。もう会いに言うてはダメよ」

暖かく優しい母から出た、予想外な冷たいコトバ……。

ねえ？

お父さま、お母さま。

あの少女は、

あなた方が子なんですよね？

僕の姉なんですよ？

どうして、会つなとおっしゃるのですか？

娘が居ないと言えるのですか？

今も生きているのに。

関係がないと言えるのですか？

お腹を痛めて生んだのでしょうか？

ねえ……、

お父さま、お母さま。

それらは果たして、実の娘に対して吐いても良い言葉なのでしょうか？

そこに居るのは、

憤慨した父、冷たい母。

瞳に宿っていた光を失った王子　。

それから少年は、外出するときは必ず護衛付きになってしまいました。

少女に会いにくくなりましたが、それでも少年は頑張り、少女に会いにいきました。

少女に会いに行つて、家に帰ると父が待っていました。

「次に会いに行くと、あの子の命はないぞ。城に連れてきて、首をはねる。だから、もう会いにゆくな」

どこか懇願が込められた、悲しげな声でした。

しかし王子は、その言葉を聞いて怒りました。

「どうして？ お姉さまなんでしょ？ 娘なんでしょ？ なんで会いにいっただけで殺すとか言うの？」

父は初めて息子が怒ったのを見て、驚きましたが静かに返します。

「……、お前たちには悪いことをしたと思っておる。それが民と交わした約束だからだ。国のために破るわけにはいかないからだ」

「だったら、何で、僕にお姉さまの存在を教えたの？ どうして？
何でお姉さまはあんな山林でひっそりと過ごしてるの？ なのに、
何で僕は不自由なく贅沢に暮らしてるんだよっ！」

一言で言い放ち、少年は城を飛び出した。

途中である物を買ひ、少女の元へ走ってゆきました。

それを見た少女は驚きました。

王子が、1日に2度も来たことがなかったからです。

「どうしたの？ わすれものでもあった？ もうおそいから、はや
くかえらないと、みんながしんばいするよ？」

「ねえ、お姉さま。 いいことを考えたんだよ」

そう言い、静かに愉快そうに笑いました。

「ねえ、だいじょうぶかな？」

「大丈夫！　きっと誰もわからないよ」

その時、誰かが来ました。

「もう、会つなと言っただろう？　ここで首をはねてやる」

そこにいたのは、悲しい顔をした王様でした。

その手に持っていた大鎌をふりあげ、

「え？」

首をはねた。

「な、なんで？ どうゆうこと？」

もう1人が問いかけます。

「しゃべってよ……。 おうじっ！」

姿を入れ替え、己の姿をした王子の体を揺すりながら。

それを見た王様は震えています。

「どうゆう事だ。 王子はお前だろう？ なあ、そうであるっ？」

祈るように言葉を絞りだしました。

「ちがう、ちがうの。 わたしはおうじじゃないの」

記憶に残る王子のそれより、どこか幼く高い声で、首を横に振りながら答えます。

王様は瞳を揺らしながら、なおも問いました。

「なぜ……、なぜだ？ お前は王子の姿をしているではないか」

「おうじが『入れ替わって、1日だけ贅沢するといいよ』って、わたしにいったの。だから、わたしは、おうじじゃないの」

ポロポロと、雫を落とします。

「なぜだ……」

そう言った王様は、その場で崩れました。

数年後、王位継承者に少女の顔がありました。

しかし、国は荒み、民の暴動が何回も何回も起きています。

ねえ、王子。

あの後、私は王子になったんだよ。

王子にもらった偽物の髪を被ったの。

でも、バレちゃった。

そのせいで、国が荒んじやったの。

ねえ、王子？

私、頑張ったでしょう？

もういいでしょ？

今からそっちに行くから……。

そうして王子の姿をした少女は、ひと思いに自らの首を刃物で突き刺した。

その顔は、どこか、儚げで美しかった。

「こ、これは……」

何度めかわからない暴動を起こしに、家にやってきた民は言葉を失いました。

いつも王様たちが居る広間には、見渡す限りの、黒い赤色……………。

そこに、生きているものは

もう居なかった。

“ 罰を受けぬ物には不幸を授ける ”

それが、最後の不の伝え……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9085n/>

私は王子

2010年10月28日04時08分発行